

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 社会学専修2年 大西佑佳

今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学での発表・意見交換と、両大学の教育研究機関や観光地の訪問を行いました。どの体験も非常に印象に残っていますが、私は主にストラスブール大学での学生ワークショップについて報告したいと思います。

ストラスブールの市街は、Petite France に代表されるように伝統的な建物が残っていてまさにヨーロッパだと感じられましたが、ストラスブール大学構内は、ガラス張りの建物が並んだりしていて近代的な印象を受けました。大学の敷地はとても広く、建物と建物の間を行き来するのが少し大変だと思いました。ストラスブール大学には、主に留学生のための語学教育を中心とした建物があり、留学生はそこで色々な相談をしたり、語学能力試験を受験したり、他の学生と交流することで語学能力を向上させたりできると聞きました。留学生受け入れへの体勢が非常に整っているのは良いことだと思いました。

学生ワークショップの前には、ストラスブール大学日本語学科の学生たちと一緒にお昼ご飯を食べながら交流をしました。ストラスブール大学の学生は皆日本語が上手くて、英語やフランス語があまり話せない私たちにとっては非常にありがたかったです。しかも、私たち日本人でも知らないような日本のポップカルチャーを知っている人もいて、動画を見せてもらったりしました。どうして日本語学科に入ったのかを聞くと、「日本のマンガやアニメが好きで勉強しようと思った」という答えが多く、語学の勉強は自分の興味関心から入ることが上達の秘訣なのだと思いました。

学生たちとの交流の後は、トランスカルチャー、グローバリゼーション、ナショナリズムなどのテーマをもとに、京都大学とストラスブール大学から3グループずつ発表を行いました。私たち京都大学からは日本の移民問題や食文化とヨーロッパやグローバリゼーションとの関係などの発表を行い、ストラスブール大学の学生は「自民党の憲法改正草案」「日本のソフトパワーに見られるミリタリズムの台頭」「ヨーロッパから見る日本のヘイトスピーチ」というテーマの発表を行いました。ストラスブール大学の学生が3グループとも日本のことに関する発表で、かつ日本人にとっても難しい内容を扱っていたことに驚きました。各グループの発表の後にはディスカッションの時間があり、発表者への質問や、自分の意見、先生からの問いかけに対する考えなどを自由に述べました。ディスカッションの最後のまとめの時に、先生から「外国人という経験は大切」という話を聞いたのが非常に印象的で、京都大学の学生もストラスブール大学の学生も、その言葉に共感している様子でした。

今回、1週間という短い期間ですがハイデルベルクとストラスブールを訪れることができ本当に良かったです。ハイデルベルクのワークショップでは、英語を駆使して高度な内容のディスカッションをできるようになりたいと強く思いました。また普段から政治に関心を持ち、日本や外国のナショナリズムについて自分なりの意見を持つておくことも大切だと考えました。この派遣プログラムに参加したことによって、上記のことを再認識できたし、自分が「外国人」となることで、日本で外国人に出会った時にどのような対応をするべきかがよく分かりました。このプログラムへの参加を支援してくださった方々には深く感謝しています。ありがとうございました。